

23. 愛することにより愛され

愛されるより愛すること?

アシジのフランチェスコの祈りとされる『平和の器』の中に「主よ。……愛されるより愛することを……」という誰の心をも打つ言葉が出てきます。「愛されることなく、愛することを」とも訳されています。いずれにしても愛の在り方の本質をついたすぐれた祈りです。私自身、若い頃からこの祈りを色々な所で多くの人に紹介してきました。今もこの祈りが印刷されたカードを折りにふれ人に贈っています。

ところが、ある時のことです。それこそ「愛されること」についてひどく悩んでおられる方から、こんな質問を受けたのです。

「先生。この祈りの素晴らしさはよく分かります。けれども、いきなりそう言われても……。これは、まず愛されないといけないことではないでしょうか。そこがいつも引っ掛かるのです」と。

とても真面目で自分の心に真実な質問です。実は私も人に薦めながら少し説明があるのではないかと考えていたことなのです。

愛されているという前提が

確かに人を愛するという事は簡単なことではありません。

ません。相手によっては物凄いエネルギーを要します。心に資本がいると言ってもいいと思います。そしてそれは愛されることによってしか蓄えられないのです。ですから愛されなければ愛するという事はとても難しいわけです。

このあまりに自明で厳しくもある事実を考えると、「愛されるよりも愛することを」という祈りは、美しくはあるけれど何とときつい精神修行なのだろうと考えてしまう人があっても不思議ではありません。その意味で少し説明を要するという事なのです。こうした祈りの背景には神に愛されているという信仰の世界があります。聖書に「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」(ヨハネの手紙一4章19節)と記されていますが、この「愛してくださった」が「愛することを」という祈りの前提となっているのです。

やはり愛することから

神に愛されていると言っても何か抽象的で分りにくいと言われる方もあるでしょう。しかし人間はたとえ不完全であっても互いに愛し合える者として創造され、今自分がここに生きているということも、様々な形で愛が注がれてきた結果であると考えたいのです。

聖書が語る神の愛がいきなり分からなくても、そのよ

うな人の愛をいくらかでも感じる事が出来るなら、たとえそれが小さな愛であっても、先ずその愛をもって「愛すること」を実践してみたいのです。

K・ヒルティは「愛のとりわけありがたい点は、ただ愛し返されることだけでなく、それよりむしろ、愛することによって自分自身が即座に強められ、活気づけられることである。」(『眠られぬ夜のために』)と述べていますが、確かに愛することによって「愛し返される」、つまり愛されるという体験に導かれるのです。それがたとえ小さな体験であっても、そのような体験を積み重ねていくとき、神に愛されているというメッセージも次第に分かりやすくなっていくのではないかと思います。とにかく愛する生活への一歩を踏み出したいものです。

堀 肇 (はじめ) / 鶴瀬恵みキリスト教会牧師 ルーテル学院大学非常勤講師・臨床/ストラタルカウンセラー (PCCA) 認定)



イスカリオテのユダは、イエス・キリストの12人の弟子の一人でありながら、裏切りを企て、十字架に引き渡しました。もっとも、それ以上のことについては、殆ど分かっていません。分かっているのは、弟子たちの金入れを預かっていたことくらいです(ヨハネ12章6節、13章29節)。裏切りについても、その過程は記されていますが、動機については不明です(マルコ14章10節、11節ほか)。また、その死についても、様々です(マタイ26章27節、使18章1節)。しかし、彼もまた弟子として召され、最後の晩餐の席にも共に与っていました(マルコ12章12節以下、他)。そして、他の弟子たちも最後にはイエスを見捨て逃げたのですから、ユダにだけ裏切り者という深い罪を見ることは正しくありません。むしろ、ユダにも、他の弟子たちのように裏切りの恥を負いながらも悔い改めて、生きてイエスを証する道が備えられていたことを思います。

同じように、私たちがまた神に背く罪深い者でありながら、赦されて、生きて主を証する存在として召されているということを感じたいのです。

第12回 ユダ

2011年3月から約半年、かたやさんに担当していた。このシリーズは今回をもって閉じさせていただきます。長らくのご厚意ありがとうございました。



(愛は)自分の利益を求めず

コリントの信徒への手紙一 13章5節

やっと春の息吹を感じられるようになりましたね。世の男性よりも受け手の女性たちがホワイトデーに熱を上げている今日この頃、皆さんお元気でしょうか？

我が家は結局チョコレートを買うこともなく、従ってお返しも期待せず、毎日ひたすら小太郎の世話に明け暮れて過ぎていきます。

雪の中、車輪を取られがちの車いすを押しながら、専門の訓練施設に通ったり、全く正反対に位置する2つの病院に通ったりして一週間もあつと言う間でした。

今冬は救急車も入院もなかったのでもまだ御の字ですが(原稿執筆当時)、皆さんもこの冬は、タダでさえ忙しい日々の育児に加えて、うっかり子どもが体調を崩して大変だったかもしれませんね。

自宅で介抱も、通院も、はたまた入院に及べば全てのしわ寄せが母親へなだれ込みます。

自分のトイレや食事もそっこのけで子どもの顔色や体温に神経をすり減らし、かと思えば他の家族のお世話も待たなし。

ヘタをすると同じ病をもらう兄弟もあらわれ、ようやく一段落したところで母親がダウンなんてテンテコ舞いながら家庭の話もよく耳にします。

さて今回は、前回引用した「愛は忍耐である」の少しあとの部分を取り上げてみました。

「愛は自分の利益を求めない」 これもまさしく母の姿だなあと思います。

この句を読むと、世間で騒いでいる3月中旬のイベント事が何だか薄っぺらに感じるのは私だけでしょうか。

倍返しだとか言うけれど、愛にお返しなんてそもそも存在しないのです。

だからこそ、愛なのです。

「ブログ」とは……ウェブログの略でインターネット上に日記などを書き込んで公開し、それへのコメントの書き込みなどを通して交流が行われているインターネット上のコミュニティサイト(交流の場)です。ここでは誌上にブログのようなコーナーを作ってみました



たるこまの
子育てブログ
「愛するとき」

母の体への「ダメージ」
「私の体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」

愛の信長(7)
「ママの体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」

「ママの体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」
「ママの体には、ダメージが溜まっています」



キラキラ、ス、ス、ス

ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。
命のある限り、主の家に宿り
主を仰ぎ望んで喜びを得
その宮で朝を迎えることを。

詩編27編4節（日本聖書協会・新共同訳）

あるテレビキャスターが、次のように書き記しています。

山で暮らしていると、毎日のようにたくさんの「なぜだろう？」と思うことに出くわします。～その最たる例がつらら（氷柱）です。外は氷点下なのに、なぜつららができるのだろう。見ていると屋根からシューと落ちてきた滴がピタッと凍りついていく。「そうか！家が暖かいからだ。」そう思っていると、気のない別荘を見てみる、とつらはほとんどありません。答えは簡単ですが、この発見に僕はたいへん感動を覚えました。「家が暖かければ、それだけ大きなつららができる！」つらは家族の団圓の象徴なのです。

昨年、私が通っている教会で4ヶ月近くをかけての建物のリフォームがなされました。昭和3年、満開の桜のもとに建物が完成してから50年近い時間の中で何度かの増改築はありましたが、やはり形あるもの……全体的に老朽化してきていることは否めません。

特に今回、チャペルを中心にきれいに整えられたことで、人々が集まるこの場所に、あらためて深い意味があることを感じています。

もともと、このチャペルは聖書のお話に出てくるノアの箱舟の内部をイメージしてデザインされていて、羊を抱えているキリストの姿のステンドグラスを正面に、手造りによる木の長椅子の会衆席が並び、板張りの床から天井にかけては、漆喰の壁に茶色く彩られた柱が縦横に組まれています。

ここに来るたびに私は何か温かくやさしい空気

を感じていました。それは、きっと長い年月を経たこの数々の木造からきている感触だと、ずっと思っていました。

ところが、それだけではないことに気がつきました。日曜日ごとに牧師によって語られてきた聖書のメッセージは、ただここに集う人たちに伝えられていたのではありません。また、讃美歌を歌う私たちの声もこの空間をただ流れていたのではありません。メッセージも歌声も、チャペルの天井・壁・柱の全てに響き渡り、浸透していつているのです。

それは、まるで囲炉裏の煙が歳月をかけてその室内を燻していくように、私たちの神様への想いが長い歴史をかけて教会の建物を燻していつているのです。温めているのです。柱や壁にそっと耳を当ててみると、もしかしたら歴代の牧師の語る声が……また大勢の人々の歌声が聞こえてくるかも知れません。

何よりも嬉しいことは、ここに集まって聖書のメッセージを聞くことで、私たちの神様への想いはますます温められていき、また、一緒に賛美することで、私たちの心の喜びも大きくなっていくということです。

そして、教会の建物の外に出てみると……目には見えないけれども……教会の屋根には、たくさんのキラキラと輝くつららができていることでしょう。神様を想う心のつららが、神様を賛美する喜びのつららが。

Jun